

平成27年度事業報告書

自平成27年4月1日 至平成28年3月31日

公益財団法人大平正芳記念財団

I. 事業活動の概要

公益財団法人として、3つの公益事業「環太平洋学術研究奨励事業」、「北京日本学
研究センターとの共同事業」、並びに「当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業」
に関し、個々事業の公益性と運営の効率化に留意しつつ、例年事業について着実に遂行
するとともに、スポット案件についての的確に対応した。

1. 環太平洋学術研究奨励事業

[1]第31回大平正芳記念賞 3件	クリスタル牌 賞金 300万円
[2]第29回学術研究助成費 2件	助成費160万円

平成27年6月12日に上記の授賞式を如水会館で行った。

2. 北京日本学研究センターとの共同事業

2015年11月30日(木) 15:00~19:00

於:北京日本学研究センター 多目的ホール

北京外国語大学迎賓レストラン

例年の共同事業の他、当財団理事長・大平裕が名誉教授号を授与され、その記念
講演会を開催するとともに、センター主催招待会に出席した。

- (1)「第十一回日本語優秀学位論文大会」表彰式
- (2)「大平裕理事長北京外国語大学名誉教授授与式
- (3)『優秀学位論文賞第6回~10回』論文集刊行式

表彰式・授与式に先立ち、下記3名の方より挨拶が行われた。

- ①北京外国語大学孫有中副学長。
内容については、6 ページ～7 ページに収録を参照。
- ②当財団を代表して、大平 知範理事。
内容については、8 ページ～9 ページに収録を参照。
- ③日本大使館参事官・横井理夫様。
内容については、10 ページ～11 ページに収録を参照。
- ④国際交流基金北京日本文化センター所長・吉川竹二様
内容については、12 ページ～13 ページに収録を参照。

多くの応募者の中から、次の6名に賞状と記念品の授与を行った。

名前	論文テーマ
李篠硯	紀長谷雄『白簪翁詩序』再考
武暁陽	日本語専攻の中国人大学生における学業的援助要請に関する研究
程睿琳	合成語における「手」の意味拡張の中日対照研究—二つの形態素からなる合成語を対象に
王如喬	ボランティア活動における大学生の「自己形成」に対する一考察
楊宇慧	日蓮国家観についての—考察—昭和新聞『日蓮聖人遺文全集』（平楽寺書店蔵版）を中心に
耿毅超	日本における M&A—その時系列の特徴と決定要因—

- (2) 大平裕・理事長による記念講演会
「大陸の王朝と日本(倭)、そして私 —王朝文化の吸収と消化そして貢献も」
内容については、14 ページ～22 ページに講演のテキストを収録。
- (4) センター主催による招待会の開催
北京外国語大学迎賓レストランに会場を移して、北京日本学研究中心主催による招待会が開催された。

3. 当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業

(1) 大平正芳記念館移管事業

- ① 4月1日:大平正芳記念館閉館にともなう遺品関係整理。
② 9月16日・17日:大平正芳新記念館移管にともなう遺品関係を観音寺市役所・文化振興課とともにチェック。

- ③ 11月13日・14日:遺品整理。
- ④ 12月18日・19日:遺品整理
- ⑤ 2月15日:香川県立図書館、大平文庫開架式。
- ⑥ 2月15日・17日・18日:大平正芳新記念館移管にともなう遺品整理・梱包を観音寺市役所・文化振興課とともに行った。

(3) 「大平正芳記念財団の事業」パンフレット及び「大平正芳記念財団レポート」発行事業

- ①「大平正芳記念財団の事業」パンフレットの発行
 - ア.「大平正芳記念財団の事業」パンフレット
 - イ.「大平正芳記念財団の事業活動」(平成27年6月から同28年5月まで)リーフレット

②「大平正芳記念財団レポート」第33号の発行

(4) その他

①マスコミ取材対応

- ・平成28年2月15日 香川県立図書館大平文庫開架式、四国新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、NHK等多数社

②財団所蔵写真等貸与対応等

- ・平成27年4月 「大平正芳政策要綱資料」の借用
(ZIGGURAT 有限会社ジグラット)
- ・平成27年4月 写真使用許可(朝日新聞高松総局)
- ・平成27年8月 生家の写真使用許可(一般財団法人 放送大学教育振興)
- ・平成27年9月 写真使用許可(TBSテレビ「上田晋也のニッポンの過去問」)
- ・平成27年12月 写真使用許可(株式会社ミネルヴァ書房)
- ・平成28年3月 写真使用許可(テレビ東京)

II 本年度中の主な庶務事項

1. 理事会・評議員会

(1)平成27年5月27日開催 臨時理事会(決議の省略(書面表決))

- ①平成26年度事業報告案及び収支決算案承認の件
- ②内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛定期提出書類案(平成26年度事業報告及び収支決算に係る)承認の件
- ③基本財産の運用について承認の件

④定時評議員会の日時及び場所並びに目的である事項等決定の件

(2)平成27年6月12日開催 通常理事会、定時評議員会

- ①平成26年度事業報告案及び収支決算案承認の件(評議員会マター)
- ②重要な財産の処分に関する件承認の件
- ③内閣府宛定期提出書類案承認の件
- ④基本財産の運用について承認の件(評議員会マター)
- ⑤特定寄附金募集承認の件(理事会マター)

(4)平成28年2月26日開催 臨時理事会

- ①評議員会の日時及び場所並びに目的である事項等決定の件

(4)平成28年3月25日開催 通常理事会、臨時評議員会

- ①平成28年度事業計画案及び収支予算案承認の件
- ②旧記念館売却の件(理事会マター)

2. 運営・選定委員会

本年度中に計4回開催し、第32回大平正芳記念賞・第30回学術研究助成費授賞者を決定した。なお、第4回鈴木 三樹之助記念・岩手大学大学院奨学金支給に関して、応募者はなかった。

3. 主務官庁関係事項

平成27年6月22日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、平成26年度事業報告及び収支決算に係る、定期提出書類の届出を行った。

平成27年6月29日 内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、現在事項全部証明書の届出を行った。

平成27年9月18日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、平成27年6月22日に提出した、平成26年度事業報告等について、修正資料の届出を行った。

平成28年3月29日、内閣府公益法人行政担当宛に、平成28年度事業計画及び収支予算に係る、定期提出書類の届出を行った。

平成27年度事業報告書の付属明細書

「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則第34条第3項」に規定する、事業報告の内容を補足する重要な事項はないことから、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第123条」に定める、平成27年度事業報告書の付属明細書に記載する事項はありません。

大平財団日本研究優秀論文授賞式・大平裕氏北京外国語大学名誉教授授与式
孫有中副学長の挨拶

2015.11.30 北京日本学研究センターにて

尊敬する大平正芳記念財団大平裕理事長、

日本大使館横井理夫参事官、北京日本文化センター吉川竹二所長、大平知範常務理事、石橋雄三理事、海野哲寿様、

ご来賓の皆様、先生方々、学生のみなさん、こんにちは。

本日、ここで、北京日本学研究センター第11回大平財団日本研究優秀論文の授賞式及び大平裕氏北京外国語大学名誉教授氏授与式を執り行うことになりました。私は謹んで北京外国語大学を代表して、受賞する学生の皆様及び北京外大名誉教授を授与された大平裕理事長に対し、心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。

「大平正芳」は中国でよく知られ、しかも中国人の古くからの友人です。1972年、大平氏は田中角栄総理大臣に協力し、中日国交正常化の回復のために偉大なる貢献をなさいました。また、大平氏のおかげで、中日両国政府は文化交流協定が結ばれ、現在の北京日本学研究センターの前身、「全国日本語教師研修班」即ち「大平班」を設立されました。当時の「大平班」なしには、今日の北京日本学研究センターがないと言えましょう。2003年、北京日本学研究センターの新しい教育ビルの完成を契機に、大平財団は本センターの教育研究の発展を支持するために、本センターに「大平文庫」をご寄贈頂きました。また、2005年、北京日本学研究センター成立20周年の際、大平財団はセンターの若い学生たちの日本研究がより深まるように、「大平財団日本研究優秀論文賞」を設立されました。

本年は北京日本学研究センター成立30周年です。この30年間で、センターがおさまた輝かしい業績を記念するために、私たちは大規模な国際シンポジウムを含め、一連の学術・文化交流活動を開催し、センター成立30周年歴史写真展も行いました。また『北京日本学研究センター資料集』や『センター卒業生論文集』などをも出版しました。

本日、センター成立30周年記念の一連の活動の一環として、私どもはここで第11回大平財団日本研究優秀論文の授賞式を開催し、同時に、大平裕理事長の長きにわたって北京外国語大学及びセンターの成長になされた巨大な貢献を表彰するために、大平裕氏に北京外国語大学名誉教授の称号を授与することになりました。また、私たちの仕事や学術成果をより広く中国の学术界に伝えるために、『日本語優秀学生論文集』の発行式を開催致します。

大平氏の遺志を継承、しかも発揚するために、以上の活動を企画・実施いたしました。

大平氏のご功績をわれわれが決して忘れません。中国に「水を飲む時、井戸を掘った人の恩を忘れてはいけない」という諺があります。私たちは、中国の古い世代の指導者、毛沢東、周恩来、鄧小平と日本の友人田中角栄、大平正芳が切り開いたこの友好の歴史を心に

刻み、「歴史を鑑にし、未来に向う」という言葉に示されたように、いつまでも歴史を忘れずに、そこから学び、さらに未来に向うことが重要だと思います。

未来は若い世代の世界です。現在、中日関係に幾多の問題が生じているが、両国の若者たちが互いに相手の長所を学べれば、中日関係の未来がきっと明るいだらうと固く信じております。

最後になりますが、改めて、ご多忙の中お越しいただいたご来賓の皆様に対し心より感謝いたします。また、大平財団の皆様は北京で素敵な滞在ができますよう、切に祈っております。

どうも、ご清聴、ありがとうございました。

2015年度 日本語優秀学位論文表彰式 御挨拶

大平正芳記念財団 理事 大平 知範

2015.11.30

只今ご紹介にあずかりました大平正芳記念財団常務理事の大平知範でございます。財団を代表し一言ご挨拶申し上げます。

本日は、日本大使館参事官・横井理夫(よこいまさお)様、北京外国語大学副学長・孫有中(そん ゆうちゅう)様、そして国際交流基金北京文化センターより所長の吉川竹二様にもご臨席いただき有り難く御礼申し上げます。また、本表彰式並びに(理事長でもある父の)講演会をアレンジしていただきました、徐一平センター長にはいつもながら厚く御礼申し上げます。

本年は祖父が亡くなりまして35年、そして大平正芳記念財団設立30年併せて貴校日本学研究センター創立30周年の意義深い年であります。

祖父は、1979年12月、亡くなる6カ月前にあたりますが、3回目の訪中、内閣総理大臣として初めての公式訪問をいたしました。それは、祖父の貴国への最後の旅となりましたが、すでに故人となられた周恩来総理との前2回の訪中で約束していたことを果たすための訪中でありました。

そのための主要なテーマは、円借款と無償援助契約を締結し日中間の経済協力関係の確固たる基礎を築くことでしたが、ここでご注目頂きたいのは、それらのテーマに加え、大平正芳からのたっの提案により日中文化交流協定が結ばれたことであります。

その具体案の一つとして「日本語研修センター」の設立が提案され、それが「日本語教師研修班」=「大平班」もしくは「大平学校」として成果をあげ、更には1985年に「北京日本語学研究センター」として発展的に再編され、今日の隆盛に至っていることであります。

私ども大平正芳記念財団と致しましても、祖父の意思を受け継ぎ、大平文庫の寄贈、日本語優秀学位論文表彰・日本学術名著発刊等の共同事業を通じ、貴大学の更なる発展と、日本語学研究センターで学ばれている皆さんが日中友好の懸け橋になれるよう、微力ながらこれからもご支援を継続してまいります。

それでは、大平正芳が、日中国交正常化達成後、経済協力関係に加え、敢えて文化交流面の友好関係の強化を願ったのは、なぜでしょうか。

祖父・大平正芳は、その点について次のような考えを表明しています。

- ① 日本と中国は近いようで遠い国である。それは「大晦日」と「元旦」の関係にもたとえられるであろうか。文化の捉え方、考え方、さらには人間の生き方、万般に対する対処の仕方が非常に違っている。
- ②それが良い悪いという問題ではない。むしろ両者の考え方の違いをお互い

に良く心得た上での相互理解が必要であること、

- ③それだけに、その相互理解と友好関係の向上をはかるには、お互いに相当な努力と忍耐が必要であること、
- ④そのためには、経済協力だけでは十分でない。それと併せて、文化交流による相互理解がどうしても必要である。
- ⑤その相互理解の軌道から外れると両国の関係は壊れ、この軌道の上を歩いている限り両国の関係はうまくいく。
- ⑥両国のメンタリティの違いをお互いに認識し合うのには「自覚的努力が厳しく求められる」が、もしその自覚が持てない人がいるならば、両国間の二千年来の友好往来と文化交流の歴史を振り返って見るが良い。
- ⑦その貴重な歴史を知ること、相互信頼の心を失わずに努力し続ける情熱と勇気と知恵を得られるはずである。

この点については、近年のぎくしゃくした日中関係を見るにつけ、現状では、一見、祖父・大平正芳の意向に反する動きが目立ちますが、確かに祖父の考え通り、両国 2000 年の交流の歴史の大勢から見れば、現状は一瞬でしかない不幸な時期に過ぎないのかも知れません。

その意味では、祖父・大平正芳の以上のような文化交流史観は、いまでも新しく、むしろ慧眼そのものだと言えるのではないのでしょうか。

一方、私の父・大平裕は、市井の古代史研究家として日中 2000 年の文化交流史を概観したレジメを纏め、皆様に日本のこともよく知ってもらいたい、如何に日本の文化が貴国に負っているか、そして、如何に消化・吸収しているか、つたない記念講演となると思いますが、しばしお付き合いを願いたく存じます。

大変長くなりましたが、ご来賓の方々のご挨拶をいただいた後、全校より厳選された「日本語優秀学位論文」に対し、財団より表彰状を差し上げたいと存じます。受賞される方々のこれまでの研鑽に対し、心より敬意を表したいと存じます。

ありがとうございました。

2015年度 日本語優秀学位論文表彰式
大平裕・大平財団理事長名誉教授授与式 挨拶

在中国日本国大使館参事官 横井理夫様

尊敬する大平裕(おおひらひろし)理事長、孫有中(そんゆうちゅう)北京外国語大学副学長、御列席の皆様、ただいま御紹介に預かりました、在中国日本国大使館参事官の横井でございます。

大平裕理事長におかれましては、お父様に当たられる、故大平正芳総理の偉業を記念するとともに、日本外交の重要な一環を形成する環太平洋連帯構想に関する学術研究等の奨励援助を行い、もって同構想の推進と思想の普及に寄与することを目的とする、公益財団法人大平正芳記念財団の理事長として、長年にわたり、中国をはじめ世界における環太平洋連帯構想の発展のための活動を精力的に推進されておられると承知しております。

大平理事長のこのような御活動に対し、このたび、北京外国語大学より名誉教授の称号が授与されることにつきまして、心よりお慶び申し上げます。

皆様御承知のとおり、大平財団におかれましては、「環太平洋連帯構想」の発展に貢献する優れた著作に対する、「大平正芳記念賞」の表彰、「環太平洋連帯構想」を発展させるのに相応しい共同研究・個人研究に対する「環太平洋学術研究助成費」の助成等を行うとともに、特に、ここ、北京日本学術研究センターとの共同事業を通じ、中国における日本研究人材の養成に寄与する助成するという、北京日本学術研究センターへの教育面での支援を長年にわたって続けておられます。

このような活動が、このたび、北京外国語大学から高く評価されたことは、日本政府としても大変名誉に感じることであり、これまでの大平正芳記念財団の日中友好交流に向けた御貢献に対し、心より敬意を表する次第です。

また、このような大平裕理事長の御活動に対して高い評価をされた孫有中副学長をはじめとする北京外国語大学の関係者の皆様に対して、厚く御礼申し上げたいと思います。

北京外国語大学には長年にわたり、日中友好の「架け橋」となる人材の育成に、力強い御理解と御支持をいただいております。貴学の存在は、我々日本大使館といたしましても、大変心強い存在であります。

本年は、ここ北京外国語大学に、中国における日本研究、日本語教育の拠点を担う北京日本学術研究センターが設立されて30周年をお祝いする年であり、本年10月に30周年を記念する国際シンポジウムを開催されたところですが、貴学のこれまでの取組に対して、この場を借りて、改めて深く感謝申し上げます。

さらには、大平理事長は、永らく、我々日本人にとっては有名な古河電気工業株式会社で常任監査役まで務められた、経済界の方でもあられます。中国の改革開放による発展を支えた、日中経済交流にも多大な御貢献をいただいたのではないかと思います。

また、このたび「大平正芳記念財団優秀学位論文賞」を受賞された皆さん、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。受賞者の皆様におかれては、これを機会に、さらに日本理解を深めていただき、将来、大平元総理の思いを受け継ぎ、日中両国をつなぐ大きな架け橋として活躍されることを期待しています。

最後になりますが、本日の「大平正芳記念財団優秀学位論文賞」を受賞された皆さんの益々の御健勝、北京外国語大学日本学研究センターが当地における日本研究、日本語教育の拠点として更なる御発展を遂げられますことを期待するとともに、大平裕理事長の益々の御健勝と公益財団法人大平正芳記念財団の今後益々の御発展を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。
本日は誠におめでとうございます。

第11回優秀修士論文賞「大平賞」授賞式挨拶

国際交流基金
北京日本文化センター
所長 吉川竹二様

尊敬する北京外国語大学 孫有中副学長、大平裕 大平正芳記念財団理事長、横井理夫 日本国大使館参事官をはじめ、ご列席の皆さん今日は。大平優秀論文賞授賞式、並びに大平理事長の名誉教授授与式にお招きいただき光栄に存じます。優秀論文賞を受賞された皆さん、受賞おめでとうございます。ご在席の院生の皆さんは大平正芳元総理のことをご存知でしょうか。

1972年の日中国交正常化の際、田中角栄総理とともに大平さんは外務大臣として訪中され、周恩来総理や毛澤東主席とも会って、国交正常化の実現に多大な貢献をされました。1978年8月の日中平和友好条約締結の時、大平さんは、自民党幹事長でしたが、この年の12月に内閣総理大臣に就任され、総理在任中の1980年に70歳で逝去されました。戦後の日本が生んだ総理として、最も知的な人物だと評されている方です。

大平さんは揮毫を求められた際、よく「永遠の今」と書かれたそうです。英語では、「Forever, the Moment」「The Forever Now」「Eternal Moment」あるいは「Time Sands Still」などと言い、永遠の時間の中で大きな意義をもつこの一瞬というニュアンスがありますが、大平さんの「永遠の今」は、むしろどの瞬間も、いまを大切にするという意味にもとれます。大平さんはまた、「明日枯れる花にも水をやる心を大事にしたい。」という言葉も話されたそうです。「永遠の今」とも相通ずる、含蓄深く、繊細で、心に残る言葉ですね。

大平記念財団のHPに掲載された年譜によれば、大平総理は、総理在任中に国会議員総選挙(衆参両院選)のまっただ中に病いに倒れ、6月12日に亡くなる2日前の6月10日、見舞いに来た旧友に漢詩を作って渡されたそうです。

その漢詩は、「得病更知旧友情 明常思長夜之愁」。“病を得て更に知る旧友の情。明くれば常に思ふ、長夜の愁”。“病床の自分を訪ねて来てくれた旧友の情を改めて嬉しく思う」という前段に続き、後段は、「夜が明けても、長い夜の愁いが心から離れない。」という解釈が普通だと思います、しかし、私は、別の解釈、すなわち、「病床にあり総理としての大任を果たせず夜も眠れず多くの心配事や愁いに沈んでいる自分の思いを、旧友の情に触れたことで、ほっと明るくしてくれた。」という意味にとりたい気がします。いずれにせよ、大平総理の責任感と友情と誠実さがしみじみと伝わってきます。

日本人はかつて日本人流の漢詩ではありますが、漢詩を作る文化的素養の伝統がありました。今はほぼ消滅したようです。中国でも、ほぼ同様の傾向を辿っているかと思います。若者も中高年も、日中ともに、漢詩は勿論、詩作するより微信やLineでメールを送るのに忙しいかもしれません。しかし、日本語のメールの文章は、多くの漢字が絵文字とともに多用されています。いずれ、漢字圏の日中両国で、アジアの伝統的な感性に培われた、新たな詩の形態が生まれ、将来、日中で交流し共有されることを私は密かに期待しています。

最後に、大平総理が逝去された後、遺徳を偲んで、大平正芳記念財団が設立されました。この大平財団が、通称「大平学校」を発展解消して30年前に設立された北京日本学研究中心に、「大平優秀論文賞」など中国への支援を継続されておられます。故大平氏の熱い思いと将来への愁いに今も応えておられる財団に敬意を表し、私の挨拶と致したいと思います。ご清聴ありがとうございました。

大陸の王朝と日本（倭）、そして私

王朝文化の吸収と消化そして貢献も

2015年11月30日

公益財団法人大平正芳記念財団

大平 裕



「告」という字がある。

後漢の時代、漢字学者であった許慎は『説文解字』の中で「告」という字は「牛」が人に口をすり寄せて、何かを伝えている（告げている）象（かたち）と解釈した。この本は長らく「漢字辞典」の原典であったが、

当然のことながら甲骨文も金文も見つかっていない時代のものである。

そして、一九七〇年、古代文学者・白川静は「口」の字を発見する。

白川は、甲骨文の「𠂔」、金文の「𠂔」の上部を「牛」ではなく

「木」の象（かたち）とみたのである。

すると「𠂔」の下部は「口」でなうことが解る。

「口」の「口」でなう「口」とは何か。それが「口」であった。

「口」とは、今更だ「口」くす」と考えられ、それによって解釈されていた

「漢字」を「口は口にあらず、祝詞すなわち神への申し文を入れる「器」である」と説いたことである。

この発見により「口」では解けなかった「漢字の生い立ち」がスルスルと、まるでもつれた糸がほぐれるように解けていった。

吉、吾、書、舍、書、音、只、可、歌、聖、若、器、哭、哀などもほんの一部の例である。

もちろん、この「口」の発見は文字の形からだけのものではない。

その背後に中国の古代文字、神話の解釈があつての発見である。

民族・習俗を知った上での発見である。

白川静は『漢字』（岩波新書）の最初に「ヨハネの伝福音書」を引用している。

「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」

白川静はこの一文に「つつき」を記す。

次に文字があった。文字は神とともにあり、文字は神であった。

（別冊太陽「白川静の世界」）（平凡社刊）より一部引用

「大陸王朝と日本（倭）、そして私」

○印内の数字は天皇の代数

1. 前漢・後漢・魏時代の日本（倭）

- (1) 「漢書地理志」……楽浪郡の海中に倭人が住み、分かれて百余国、毎年使者を送り献見している。
- (2) 「後漢書倭伝」……漢に通じる国は30ばかり、それら諸王の王、大倭王は耶馬臺に居住している。
 - ・光武帝建武中元2年（57）倭の奴国王朝賀、印綬を与う。（金印、現存）
 - ・安帝 永初元年（107）倭国王（師弁）接見を求む。
- (3) 「三国志倭人伝」……明帝正始二年（238）女王卑弥呼あり男弟これを助く。



日本の建国神話と一致。女王・男弟＝天照大御神・高皇産靈尊

（『日本書紀』『古事記』）

(4) 大陸王朝よりの文物の導入

- ・前漢・後漢・魏（呉）鏡の輸入
- ・漢字、漢文及び暦、天文の知識導入

2. 大和朝廷の成立と日本（倭）の半島進出

- (1) ①神武天皇の即位（≒250）と畿内のまとめ。～⑨開化。
- (2) 国内統一の進歩（300～350）・・・⑩崇神、⑪垂仁、⑫景行、倭武尊
- (3) 任那・加羅（倭人居留地）を基地に神功皇后による新羅征討（362?）。
- (4) 高句麗の南下と百済を支援する日本との15年戦争（391～407）
高句麗（広開土王、長寿王）：日本（⑬応神、⑭仁徳）←広開土王碑（吉林）

3. 南朝（宋・齊・梁）と日本（倭）国（400～500）

- (1) 南朝への遣使（南朝側記録：13回）
 - ・遣使の目的・・・受爵、文物・漢字（呉音）の輸入。
 - （例）明帝昇明二年（478）「詔徐武使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王」
 - ・「倭の五王」と天皇の対比
讚（⑯仁徳）・珍（⑰履中）・濟（⑱允恭）・興（⑳雄略）・武（㉑清寧）
 - ・元嘉曆（宋 445～）の導入……㉒雄略天皇紀（『日本書紀』）より採用

(2) 百済の宗主国としての倭（日本）

阿華王、腆支王、東城王……倭（日本）により擁立、武寧王…九州で出生。

|| || ||

⑮応神、⑯仁徳、⑰雄略

(3) 高句麗王家（前 32 年建国）・百済王家（高句麗王家の系）の血を伝える

倭（日本）の天皇家

※百済武寧王（501-523）の太子（淳陀）、人質として大和へ、子を残して薨去、
9 代後の高野新笠が ④⑨ 光仁妃に、⑤⑩ 桓武の生母となる。→ ⑫⑫ 今上天皇

4. 隋・唐と日本

(1) 遣隋使～607、614 年、隋使来日（608）… ③③ 推古

遣唐使（630～894）～19 回任命、うち 15 回実施。34 舒明～⑤⑨ 宇多

(2) 遣唐使の目的

① 律令制度の導入

大化の改新（645～）、近江令（668）、飛鳥浄原令（681）、大宝律令（701）、
養老律令（718）

② 仏教の本格導入、佛寺の建立（法隆寺～東大寺）、唐僧の鑑真招聘。

③ 官都の建設…藤原京、平城京、長岡京→平安京（⑤⑩ 桓武—⑫⑫ 孝明）

④ 儀風曆の招来、国史「日本書紀」の編纂（720 年撰上）。元号の発布。

⑤ 文物の輸入、特に書籍・佛典。

(3) 唐による高句麗滅亡（668）、唐・新羅対百済・日本戦、百済滅亡（663）

(4) 僧円仁による「入唐求法巡礼行記」

5. 大陸王朝（中央集権体制）との別離

(1) 遣唐使の廃止と国風文化の発展

① 和歌（古今和歌集～）、漢詩（懷風藻）、大和絵、日記、旅行記、小説

② ひら仮名、カタカナの考案→女性の文学への進出「源氏物語」「枕草子」…。

③ 返り点（レ点、一二三点、上中下点、甲乙丙点）の考案→四書五経読解可能へ。

④ 国字の考案（日本製漢字、約 1500 文字）

(2) 律令制度の崩壊と武士政権の成立

・鎌倉（源、北条）・室町（足利）・安土桃山（織田、豊臣）・江戸（徳川）

（1192～1868 年、(⑨⑥ 後醍醐天皇を除く)。

6. 宋・元・明朝と日本

(1) 宋～① 禅宗の招来と禅僧の渡来、武家による尊宗、禅寺の建立。

② 文物の輸入

(例) 寧波—博多間交易船……銅錢 7 8 t, 陶磁器 2 万点他/隻。

(2) 元～1268、1271 年 蒙古使来日、殺害される。征日本行省の設置。

1274 (文永の役)、1281 (弘安の役) で元寇全滅

(3) 明～①遣明船……刀劍、硫黄、銅の輸出。

②倭寇 (倭人、明人、朝鮮人) も海禁。

③朝鮮 (李朝) での日明軍の交戦→明朝の衰退へ。

7. 安土桃山時代 (織田信長、豊臣秀吉、徳川家康)

(1) 戦国期の終了と刀狩、(2) ポルトガル・スペイン宣教師の来日と布教、禁教

(2) 信長の命による佛僧・宣教師による宗教論争。ローマ法王への使節団の派遣。

(3) 芸術、茶道 (一期一会) の発展……安土城・大坂城・京都聚楽第の建設。

8. 江戸時代 (徳川幕府)

(1) 鎖国、但し、長崎を清国、オランダに開放。李朝の釜山に倭館を設置。

李朝からは 12 回の朝鮮通信使来日。

(2) 大名の参勤交代、庶民の国内旅行 (寺社参詣) 熱による全国的交流及び大名による地方文化・産業・教育の振興。

(3) 260 年間に及ぶ太平 (泰平) の時代

…芸術・文化の発展 (能、文楽、歌舞伎、絵画、浮世絵、大衆文学) と科学知識 (蘭学～) の向上。

日本初の天体観測による暦の採用、数学 (和算)、全国測量など。

(4) 露国 (1792～)、英国 (1797～)、米国 (1837～) など各国艦隊の来航とアヘン戦争 (1840)。



・江戸湾の防備 (1808～)、大砲の鍛造 (1848)、

製鉄所/造船所の建設 (1853～)、国産軍艦 (鳳凰丸) の建造 (1854)

・薩摩・英国戦争 (1863)、四国艦隊による下関砲撃 (1864)

尊皇攘夷→公武合体→幕府討伐→明治維新 (1868)

9. 明治時代 (1868～1912)

(1) 国政改革～廃藩置県、国民皆兵、陸海軍の整備、教育の振興、殖産興業 (製鉄、造船、製糸……)

(2) 知識人による国民への啓蒙活動

福沢諭吉～「西洋事情」「学問のすすめ」

(3) 欧米諸国の科学技術の導入・消化。

欧米諸国の科学・医学・文学・歴史書の日本語への翻訳（和製漢語）

(4) 不平等条約の改正

(5) 露国の東進と南下

①曖昧条約（1858）

②北京条約（1860）

A. 日露樺太共有条約（1867）

B. 樺太・千島交換条約（1875）

③露国の満州侵攻続く

イ. シベリア鉄道全通（1894）

ロ. 東信鉄道条約（1895）

ハ. 旅順・大連租借（1898）

(6) 朝鮮半島を巡る日清間の争い

①北洋艦隊（鎮遠、定遠）来航（1881）

②東学党の乱、日清戦争（1884）

③露、佛、独 三国干渉（1885）

「臥薪嘗胆」…対露戦

④朝鮮問題に関しての日清、
天津条約（1885）

(7) 義和団事件（1900）と北京議定書（1901）

①8ヶ国（連合軍）対義和団／清朝（西太后）

②ロシアによる満州占領（1900）・朝鮮半島～触字

③北京議案書…各国に北京・天津への軍隊駐留承認

↓
・日本軍部隊の北京郊外駐留

(8) 日露戦争（1904～1905）

・乾坤一擲の国運をかけた戦い（陸での辛勝。海での大勝）

・日本権益の拡大

(9) 明治天皇崩御と乃木大将の殉死。

（日本の栄光と新しい悲劇の始まり）

1 「ひらがな」と「カタカナ」

<ひらがな>

<カタカナ>

安 → あ	加 → か	阿 → ア	加 → カ
以 → い	幾 → き	伊 → イ	幾 → キ
宇 → う	久 → く	宇 → ウ	久 → ク
衣 → え	計 → け	江 → エ	介 → ケ
於 → お	己 → こ	於 → オ	己 → コ

2 返り点

(レ点、一二三点、上中下点、甲乙丙点)

漢文を読むとき、また書き下し文にするときに欠かせないのが返り点です。
 返り点には「レ点」「一二三点」「上中下点」「甲乙丙点」の4種類があります。
 ちなみに返り点は、必ず漢字の左下に記されています。
 次の画像をみながら読み進めてください。(「マナペディア」より)

○レ点

月ニ有_レ陰

○一二三点

欲_ス三 東ノカタ 渡_ニラント 鳥 江_ヲ一

○レ点と一二三点が一緒に使われる場合

低_レレテ 頭_ヲ 思_ニフ 故 郷_一ヲ

○上中下点

不_下 為_ニ 児 孫_一ノ 買_中ハ 美 田_上ヲ

○甲乙丙丁点

莫_乙シ 不_下ル 延_レバシテ 頸_ヲ 欲_中セ 為_ニタメニ
 太_子一ノ 死_上スルヲ 者_甲

和字・倭字・皇朝造字・和製漢字などとも呼ばれる。会意に倣って作られることが多い。峠(とうげ)・榊(さかき)・畑/畠(はたけ)・辻(つじ)など古く作られたものと、西洋文明の影響で近代に作られた腓(スイ)・腺(セン)・腔(チツ、本来はシツ)・甞(キログラム)・秆(キロメートル)・蚝(ミリリットル)などがある。主に訓のみであるが、働(はたらく・ドウ)のように音があるものもあり、鋳(ビョウ)・鯨(コウ)など音のみのものもある。「鋳」には「鋳力」と表記したときの音読み「ブ」と、「鋳」一字で表記することで音読みから派生した訓読み「ぶりき」がある。また、匂(ニ+ヒ)の様に構成要素に片仮名が使われる事も有る。

中国などに同じ字体の字があることを知らずに作ったと考えられる文字〔「俸(くるま・じんりきしゃ)」・「閑(ゆり・しなたりくぼ)」・「鯛(あさり)」・「鞆(かばん)」など〕や、漢字に新たな意味を追加したもの〔「森(もり)」・「椿(つばき)」・「沖(おき)」など〕は、国字とは呼ばず、その訓に着目して国訓と呼ばれる。中国などで意味が失われているもの〔「栗(しずく)」など〕は、中国などで失われた意味が日本に残った可能性も否定できず、国訓ともいえない。国訓のある文字に着目して、国訓字と呼ばれることもあるが、一般的ではない。

日本で作られた国字の輸出現象も見られる(「鱈(たら)」など)。また、姓の「畑(はた)」は中国でも日本人の姓を表記するために用いられて、『新華字典』などの字書にも収録されているが、つくり(音符)の「田」の中国語音で読まれている。
(「ウィキペディア」より)

メ	凧	噺	塙	峠	朽	榊	楨	榎	甞
俣	匂	噲	漚	弓	杓	榊	榎	榎	甞
倂	匂	圪	娉	恠	榊	榎	榎	榎	甞
俸	凧	圪	娉	杓	杓	榎	榎	榎	甞
働	凧	袋	岩	杜	梅	柳	榊	煩	甞
凧	凧	圪	岬	扱	朽	榎	榎	燦	甞
凧	噸	埭	岬	杓	杓	榎	榎	甞	畑

4 呉音から漢音へ

日本に漢字が本格的に入ってきたのは、中国の南北朝の時代である。南朝は漢民族の国家であり、六朝（りくちょう）と呼ばれる。北朝はいわゆる五胡十六国で、漢民族にとっては異民族の国家だった。そのため日本も百済も新羅も南朝が正統だと思っていた。

日本は朝鮮と違い、中国とは海をへだてている。そのため中国語は断続的に日本に入った。その第一回が南朝からのものである。この地はかつての呉の地方であったため、のちに他の中国語の発音と区別され「呉音」と呼ばれる。

第二回目は唐の時代になって日本に入った。唐の首都圏である洛陽・長安地方で話されていた中国語で、漢民族の標準語ということで「漢音」と呼ばれる。

呉音は仏教語や古くから日本語にとけこんだ物の名、漢音はかたい漢文用語が多い。

呉音と漢音は時代と空間を異にする発音がもとになってできた。この二つの音がどのように対応するのか、以下で見てみよう。

呉音・濁音→漢音・清音

	呉音	漢音
大	ダイ	タイ
地	ヂ	チ
土	ド	ト
分	ブン	フン

呉音・マ行→漢音・バ行

	呉音	漢音
美	ミ	ビ
万	マン	バン
無	ム	ブ
幕	マク	バク

呉音・ナ行→漢音・ダ行

	呉音	漢音
内	ナイ	ダイ
男	ナン	ダン
女	ニユ	ヂョ
怒	ヌ	ド

呉音・ニ→漢音・ジ・ゼ

	呉音	漢音
児	ニ	ジ
日	ニチ	ジツ
若	ニヤク	ジャク
人	ニン	ジン

呉音・ウ→漢音・オウ

	呉音	漢音
口	ク	コウ
工	ク	コウ
頭	ツ	トウ
公	ク	コウ

呉音・ウ→漢音・イウ

	呉音	漢音
右	ウ	イウ
九	ク	キウ
久	ク	キウ
留	ル	リウ

呉音・オン→漢音・エン

	呉音	漢音
建	コン	ケン
言	ゴン	ゲン
権	ゴン	ゲン
遠	ヨン	エン

呉音・アイ→漢音・エイ

	呉音	漢音
西	サイ	セイ
札	ライ	レイ
米	マイ	ベイ
体	タイ	テイ

呉音・ヤウ→漢音・エイ

	呉音	漢音
京	キャウ	ケイ
兵	ヒヤウ	ヘイ
正	シャウ	セイ
丁	チャウ	テイ

呉音・チ→漢音・ツ

	呉音	漢音
一	イチ	イツ
質	シチ	シツ
吉	キチ	キツ
遠	タチ	タツ

佐藤和美「言葉の世界」より

幕末以前

日本語では古来、中国から大量の漢語、すなわち中国語の単語を借用してきたが、漢語の造語法に習熟するにしたいが、独自の和製漢語を造るようになった。その造語法をみると、まず漢字で表記した大和言葉を音読したものがある。例えば、「火のこと」を「火事」、「おほね」を「大根」、「腹を立てる」を「立腹」とする類である。また、中国語にない日本特有の概念や制度、物を表すために漢語の造語法を用いたものがある。「介錯」「芸者」などがその例である。

幕末以後

19世紀後半には、西洋の文物・概念を漢語によって翻訳した和製漢語が多く作られた。これらを「新漢語」と呼ぶことがある。ただし、新漢語の割合は漢語全体から見れば必ずしも多いわけではない。第二次世界大戦後の調査によれば、新聞・雑誌の二字漢語の上位1000語のうち、902語は幕末までに存在したものである。ただ、文章の種類にもよるが、近年報道文などは、固有名詞などを含めると旧来からの漢語の割合よりも、新漢語の割合の方が多い傾向がある。

新漢語は2種に分けられる。1つは、「科学」、「哲学」、「郵便」、「野球」など、新しく漢字を組み合わせで作った、文字通り新しい語である。もう1つは、「自由」、「観念」、「福祉」、「革命」など、古くからある漢語に新しい意味を与えて転用・再生した語である。後者を狭義の和製漢語には含まないこともある。近代以降は、「-性」、「-制」、「-的」、「-法」、「-力」や「超-」などの接辞による造語も盛んになり、今日でもなお新しい語を生産している。

和製漢語は特に近代以降、中国に逆輸出されたものも少なくない。これを日本の大陸侵攻と結びつけて考える向きもあるが〔要出典〕、むしろ、中国が近代化を遂げる過程で、特に日清・日露戦争前後に、中国人留学生によって日本語の書物が多く翻訳されたことが大きいともされる。中国語になった和製漢語の例として、「意識」、「右翼」、「運動」、「階級」、「共産主義」、「共和」、「左翼」、「失恋」、「進化」、「接吻」、「唯物論」など種々の語がある。中国でも自ら西洋語の翻訳を試み、華製新漢語なるものを作り出していたが、しばしば和製漢語と競合するようになることもあった。

「中華人民共和国」の「人民」「共和国」も和製漢語であり、国名だけでなく中国の体制に必要な不可欠な概念までも和製漢語には含まれている。また、同じく漢字文化圏である台湾、大韓民国、ベトナムでもこうした和製漢語を自国語漢字音で取り入れている。これには日本では和製漢語とは見なされない漢字書きの訓読み和語（割引など）も含まれている。

幕末以降の和製漢語の例

文化、文明、民族、思想、法律、経済、資本、階級、分配、宗教、哲学、理性、感性、意識、主観、客観、科学、物理、化学、分子、原子、質量、固体、時間、空間、理論、文学、美術、喜劇、悲劇、社会主義、共産主義など。

このように、東北アジア各国で使われる漢字でできた近代的な概念語の大半が日本製となっておりと高島俊男は主張している。
(「ウィキペディア」より)